

News IR

IR（Institutional Research/インスティテューショナル・リサーチ）は、大学組織において何らかの決定を行う際に、それをサポートするための情報収集と分析を意味します。

二松学舎大学では、大学の機関活動に関するデータ収集・分析を行い、大学がどのような課題を抱えているのか、その課題はどのような要因と関連しているのか、今後どのような意思決定を取り得るのか等を客観的に把握し、政策形成・意思決定を支援するための活動を行っています。

2021年度 1号 (NO.11)

Contents

- ◆「学生の実態・満足度調査」の結果概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
- ◆二松学舎憲章・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

◆「学生の実態・満足度調査」の結果概要

2020年11月30日（月）～2020年12月18日（金）にかけて、本学の1年次・3年次・4年次生を対象として、学生の実態・満足度調査を実施しました。
調査は、大学生活全般に関する56問（5段階の選択回答方式等）と2問（自由記述方式）で答えてもらいました。

▶本調査の実施目的

- ①学生の本学の「学び」に対する満足度を定量的に把握すること。
- ②他大学と比較することで、本学の特徴を定量的かつ可視化して認識すること。

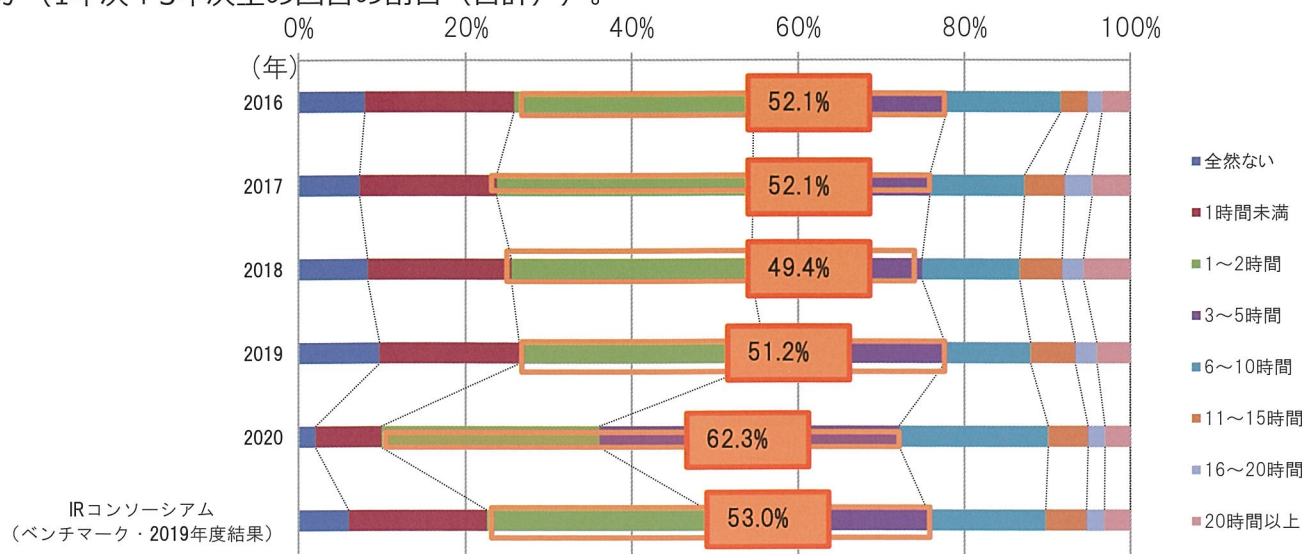
調査回答数は、下記ようになります。

	文学部			国際政治経済学部		合計
	国文学科	中国文学科	都市文化デザイン学科	国際政治経済学科	国際経営学科	
1年	204	69	37	55	47	412 (57.5%)
3年	141	38	19	71	31	300 (39.1%)
4年	118	36	19	94	—	267 (38.1%)
全体	463	143	75	220	78	979 (44.8%)

（回答率：回答数／在籍者数）

●学生の学習時間について

▼1週間あたり、「授業時間以外に授業課題、準備学習・復習をする」ことにどの程度の時間を費やしましたか（1年次+3年次生の回答の割合（合計））。

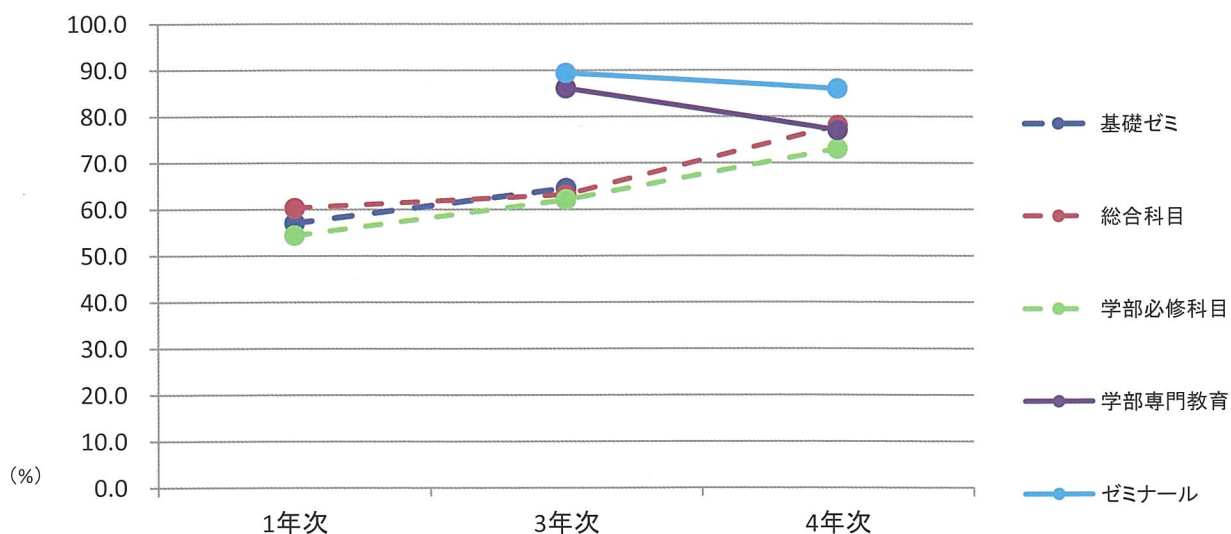


- 2020年度は大幅新型コロナウイルス感染症対応において、遠隔授業が中心となりました。例年に比べ、授業以外の学修時間は「1時間未満」が減少、「1~5時間」が10%強増加しました。自宅で、課題に取り組む時間が増えたためであると推測できます。
- 2020年度から、毎回の授業における課外学修内容や目安となる学修時間について、具体的にシラバスに記載されることで、より主体的な学修を促す仕組みが導入されています。

●2017年度入学生の教育内容等満足度の経年変化

2017年度に1年次生として入学した学生が、2020年度には4年次生となり、この3月に卒業を迎えました。2017年度入学生の経年変化として、入学後の学生の修学実態を把握するとともに、大学の教育成果や、本学の抱える課題等の検証材料として、各種委員会等で報告・検討し、教育改善に活かしています。

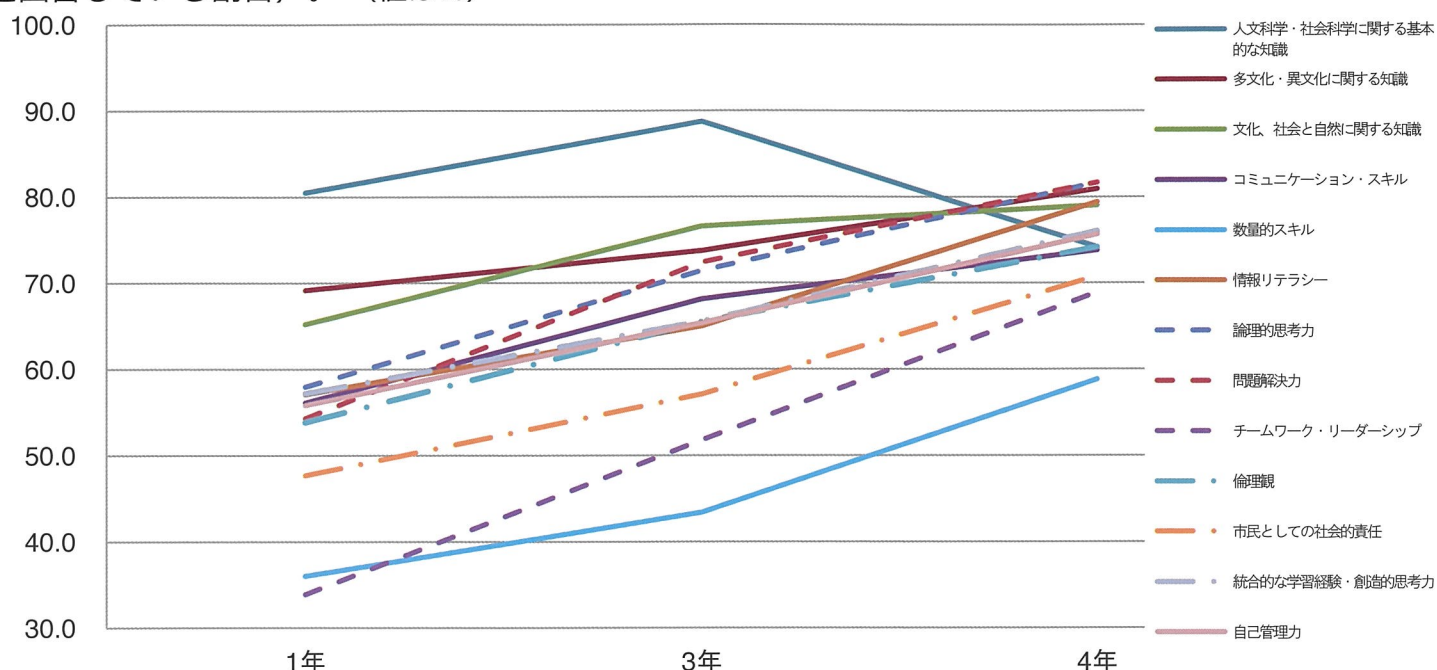
▼教育内容等にどの程度満足していますか（『とても満足』・『満足』と回答している割合）。（値は%）



- ゼミナールの指導内容や、学部専門教育の授業内容に高い満足感を持っていることが確認できました。
- 総合科目・学部必修科目についても、総じて右肩上がりとなっており、専門的内容を学ぶにつれ満足度が高くなる傾向が確認できました。

●2017年度入学生の学修成果の変化

▼入学した時点と比べて、能力や知識はどのように変化しましたか（『大きく増えた』・『増えた』と回答している割合）。（値は%）



➤ 学士力項目の能力等が増えたと思うかの自己判断を聞いたものでは、知識・理解はゼミナール中心の4年次生で「増えた」とする割合がやや低下しているものの、コミュニケーションスキル、論理的思考力、問題解決力、チームワーク・リーダーシップ、統合的な学習経験・創造的思考力といった項目が右肩上がりの成長を示していることが確認できます。

➤ 【E.入学時からの能力や知識の変化について】の質問事項

（設問：「大学の歴史・建学の理念に基づく二松学舎生としての自覚」は集計から除く）

人文科学・社会科学に関する基本的な知識
多文化・異文化に関する知識
文化、社会と自然に関する知識
コミュニケーション・スキル（日本語と特定の外国語を用いて読み・書き・聞き・話すことができる）
数量的スキル（自然や社会的事象について、シンボルを活用して分析し、理解・表現することができる）
情報リテラシー（情報通信技術を用いて、多様な情報を収集・分析して判断し、効果的に活用することができる）
論理的思考力（情報や知識を複眼的・論理的に分析し、表現できる）
問題解決力（問題を発見し、解決に必要な情報を収集・分析・整理し、その問題を確実に解決できる）
自己管理能力（自らを律して行動できる）
チームワーク・リーダーシップ（他者と協調・協同して行動できる。また、他者に方向性を示し、目標の実現のために動員できる）
倫理観（自己の良心と社会の規範やルールに従って行動できる）
市民としての社会的責任（社会の一員としての意識を持ち、義務と適正に行使しつつ、社会の発展のために積極的に関与できる）
統合的な学習経験・創造的思考力（獲得した知識・技能・態度等を総合的に活用し、自らが立てた新たな課題にそれらを適用し、その課題を解決する能力）
大学の歴史・建学の理念に基づく二松学舎生としての自覚

●1年次生の学生生活の充実度について（自由記述）

2020年度は新型コロナウイルス感染症による世界的なパンデミックに見舞われ、その感染拡大防止対策のため本学の『学び』もこれまでとは違った制限の中で行わなくてはなりません。大学生活を楽しみにしていた1年生においては、制限下でのキャンパス通学となったため、「学生生活の充実度」に低下がみられました（前年度比）。その理由を自由記述から調査しました。

充実していた

- ・通学不要となった時間を有効に活用できたため。
- ・オンラインで活動しているサークルに入り、交友関係が広がったため。
- ・登校できていないが、学ぶことがたのしいから。
- ・オンライン上で交流を深める可能性を実感しました。授業での新しい知識の習得に楽しみを感じており、総じて充実していました。
- ・思っていた大学生活ではなかったが、勉強や課外活動を充実させることができ、現状に満足しているため。

「充実していた」と回答していた学生の理由では、時間の使い方を調整して様々なことに挑戦したという記述が多くみられました。コロナ禍でも、大学生活を充実させる方法を主体的に考え行動している学生の充実度が高い傾向がみられました。

充実していなかった

- ・学業以外の関わりがないため。
- ・友達ができないため。
- ・対面とオンライン併用授業でも、登校している学生が少なく交流が少なかったから。
- ・新たな経験をするといった大学生らしい学生生活が送れていないから。
- ・サークル活動ができないため。

「充実していなかった」と回答した学生の理由では、コロナ禍で大学に通学できないことを原因とする記述が大半を占める結果となりました。

- 2020年度はコロナ禍のため想像していた大学生活ではなかったと思います。それでも制約の多い現状の中でもできることを考え、学生生活をより充実させていこうとする記述があることは、二松学舎大学の学生の強みであると感じました。有意義な学生生活を送っていただけるように調査結果を活用いたします。

【二松学舎憲章】

<建学の精神の発揚>

- ・教職員は、建学の精神「東洋の精神による人格の陶冶」、「己ヲ修メ人ヲ治メ一世二有用ナル人物ヲ養成ス」の発揚に努めます。

<教育・研究の目標達成>

- ・人材育成のため、自らその体現者となるべく、自己研鑽に努めます。
- ・法令及び学則を順守し、道德心と倫理観を持ち、職務に当たります。
- ・現状を把握し、自ら課題を見つけ、教育・研究の質の向上に努めます。

<学生生徒支援>

- ・教職員一人一人が、学生生徒の人格と人権を尊重します。
- ・教育・研究の充実に常に努め、教育・研究環境の整備を行い、学生生徒の満足度向上を目指します。

<社会貢献>

- ・教育・研究活動を通じて、地域社会への貢献に努めます。
- ・社会情勢に常に目を向け、国際社会と世界平和に寄与します。

【発行主体】

二松学舎大学

大学改革推進部 I R推進室

〒102-8336 東京都千代田区三番町6番地16

TEL (03)3261-1285

FAX (03)3261-7413

[E-mail] gakumu@nishogakusha-u.ac.jp

2021年7月31日発行